

中国人作家莫言と弁護士坂和章平との「対談」が実現！

第1．はじめに

1．なぜ莫言との対談が？

2011(平成23)年7月26日(火) アジアでノーベル文学賞に最も近い作家と言われている莫言氏と弁護士坂和章平の対談が実現した。これは、莫言の古くからの友人であり、神戸国際大学教授である毛丹青氏の尽力で実現したものだ。(写真第1 -)

その内容は 7月26日午前中の坂和LO4階会議室での公式対談、その他大阪天満宮のすぐ斜め向かいにある古式ゆかしき料亭「相生楼」での昼食を兼ねた懇談、場所を有馬温泉のホテル、エクシブ有馬離宮に移しての夕食+温泉+宿泊談義と盛りだくさんになった。

2．対談の準備は？

(1) 莫言との対談という何ともビッグな企画は、6月9日の早朝に毛丹青から坂和にかかってきた電話によって突然進行することになったが、私はそれまで作家莫言の小説を読んだことは全くなかった。もっとも張芸謀監督の初監督作品で1987年のベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した映画、『紅いコーリャン』はすばらしく、その原作者が莫言であることはよく知っていた。さらに、日本では張芸謀の「しあわせ3部作」と呼ばれている『初恋のきた道』(00年)『あの子を探して』(99年)と並ぶ『至福のとき』(02年)や、香川照之が出演した霍建起監督の『故郷の香り』(03年)の原作が莫言であることもよく知っていた。しかし、それだけの知識ではとてもアジアでもっともノーベル文学賞に近い作家との対談を十分に展開できないことは明らかだ。

(2) そこで急遽莫言の小説をできるだけ購入したが、既に絶版になっているものもあり、手に入ったのは『白檀の刑』『牛 築路』『赤い高粱』『蛙鳴』『転生夢現』『四十一炮』だけ。7月26日の対談までわずか1ヵ月。その間にこれらを全部読破し、私なりの問題意識を整理して対談に望まなければ・・・。そんなプレッシャーの中、坂和事務所恒例の7月25日の天神祭懇親パーティーも中止し、莫言との対談に全力を傾注することに。

3．莫言小説の面白さとは？

(1) 最初に読んだのは莫言の最新作『蛙鳴(あめい)』(写真第1 -)。これは476頁の大作で、そこで描かれるのは、中国の「一人っ子政策」の恐るべき姿だ。オタマジャクシは作家である主人公万足のペンネームだが、男性の精子の形もオタマジャクシだから、そこにはどんな意味が？山東省高密県で農民の子として生まれた莫言には、蛙鳴(蛙の鳴き声)は見馴れた農村風景の中で

の耳になじんだ音。もう一人の主人公である「伯母」が「取りあげばば」を排し、近代的医術を駆使して取り上げた赤ん坊の数は1万人にものぼるらしいが、他方で違法な妊娠をした女たちの身体から無理矢理(?)墮胎させた赤ん坊の数は?「文化大革命」や「下放」の悲劇も描かれるが、女性が子を孕むことの意味やそれを墮ろすことの罪深さ、そしてそれに関わる男や役人たち、さらに中国共産党の政策の問題点が重厚な文体から浮かび上がり、人間の営みの喜怒哀楽がひしひしと伝わってくる。こんな「重い」小説は、大学時代に読んだ高橋和巳の『邪宗門』(65年)以来だ。

(2) その後は『赤い高粱』(写真第1-)と『牛 築路』(写真第1-)。これは文庫本だから比較的読みやすいし、『赤い高粱』を読んでいると映画の『紅いコーリャン』の「あのシーン」「このシーン」がまざまざと目の前に浮かんでくる。その次は文庫本になっている『白檀の刑』上下(写真第1-)だが、多くのブログ評で絶賛されているように、これはメチャ面白い。次は『転生夢現』上下(写真第1-)と『四十一炮』上下(写真第1-)を並行しながら読み進んだが、対談の日は日ごとに迫り、結局ラストまで読み切れない状態で26日を迎えることに。莫言の小説はとにかく面白い。読み始めたらやめられなくなるのはかっぱえびせんと同じ?それはともかく、何しろ大作だから、登場人物が多く時代背景も複雑。そのうえ映画でいうフラッシュバックの手法がふんだんに使われているから、きちんと整理しておかなければ、その時はわかって後になればワケがわからなくなってしまうおそれがある。

(3) そこで私は本の中への書き込みはもちろん、ノートに登場人物を整理したうえ、時代や出来事をメモしていくという読み方をすることに。このメモさえあれば、莫言との対談であの本のあんな人物やあんなシーンという話になっても十分対応できるはずだ。

4. レジメをつくらなくちゃ・・・

(1) 対談の数日前に、家のベッドで寝ている時にパッと思いついたのが、レジメの作成。何かに集中している時は夜中に眠っている時でも頭は働いているもので、この時も夢の中でレジメの筋立てを考えていたらしい。レジメの基本は莫言文学の整理と質問事項の整理だが、いざ事務所でレジメづくりに取りかかってみると、莫言との対談で論じたい映画あれこれ、弁護士坂和が影響を受けたこんな本、あんな本、の他、1949年生まれの坂和、1955年生まれの莫言、1962年生まれの毛丹青の3人が今日まで生きてきた人生におけるポイント、そして3人が生きてきた時代における日中の時代状況を対比させた一覧表の作成、などを思いついた。さらに弁護士として証人尋問に臨む際にいつも周到に準備しているのと同じように、私の質問事項は対談日が迫っ

てくるにつれて次第に鮮明になってきた。

(2) その結果、本体レジメの他、対談テーマ その1「作家vs弁護士のフィールドの異同について」、その2「莫言の孤独と飢えvs坂和の孤独と飢え」、その3「歌は世につれ、世は歌につれ 坂和は誰よりも歌を知っている？カラオケ博士？」、その4「弁護士坂和の執筆活動の紹介(一部)」等の追加レジメや、レジメ第2部「弁護士坂和章平と毛丹青との共同作業あれこれ」、など多くの対談用レジメと資料が完成した。

以上